

教員志望学生の虫に対する嫌悪感情について

虫嫌いの自然体験活動に対する意識への影響

○田中悠樹

TANAKA Yuki

京都教育大学

【キーワード】 虫, 嫌悪感情, 自然体験, 教員志望学生

1 目的

教育現場における自然体験活動の減少が子どもたちの虫嫌いを招くとされる(日高, 2005)。また, 鑄物・地下(2014)は実践経験の有無を問わず保育士や教師を目指す学生の多くが幼児期の虫とのふれあいが必要であると考えていると示した。一方で保育者や教員志望の学生には虫に対して嫌悪を示す者がおり、それ故に子どもたちの虫を用いた自然体験の取り組みを阻害する可能性が考えられる。そこで本研究では、虫に対する嫌悪が自然体験への考え方へ影響するのかどうかを心理学的に明らかにすることを目的とする。

2 方法

(1) 調査について 教員養成大学の学生 108名を対象に質問紙調査を行った。調査時期は2015年6月初旬であった。

(2) 調査項目 大きく3項目である。

①虫全体に対する好悪 虫好きか虫嫌いかを2件法で尋ねた。

②虫に対するイメージの分類 日高(2009)において想起されやすかった9種類の昆虫を好き・嫌い・どちらでもない、の3群に分類することを求めた。

③自然体験への考え方の尺度 学校現場における自然体験に対する考え方について尋ねるもので、6項目6件法である。なお、その具体例については結果にて示す。

3 結果

各昆虫がどの群に選択されやすいか、その選択率を図1に示す。 χ^2 検定によって選択率を比較した結果、好ましい群にはカブトムシ・チョウが、嫌だと思う群にはゴキブリ・ガ・ハチ・イモムシが有意に選択されることがわかった($p<.05$)。有意差の見られなかったセミ・ダンゴムシ・バッタは中立的な群とした。

次に、虫嫌い群の中で、中立の虫を1つでも嫌悪している者を虫嫌い高群に、それ以外の虫嫌い群を低群に分類した。そのn結果、虫好き群21名、虫嫌い低群38名、虫嫌い高群49名となった。

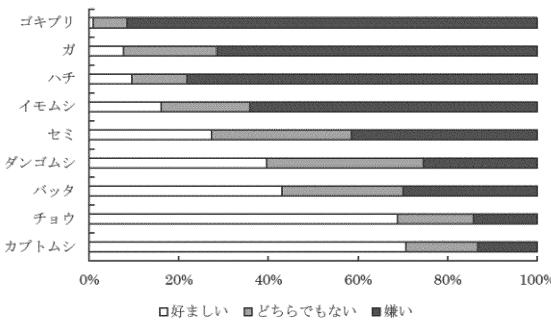


図1

この3群において、自然体験活動への考え方には有意な差が見られるかどうか確認するために、1要因分散分析による平均値の比較を行った。結果、「自然体験活動の一環として、虫を用いた活動を行いたいと思う」「幼児期・学童期の子どもにとって虫に触れる経験は重要だと思う」「教師が進んで虫と触れ合う活動を行えば、子どもも積極的に虫と触れ合う活動を行うと思う」の3項目で主効果が見られた($p<.05$)。多重比較の結果、3項目ともに虫嫌い高群、虫嫌い低群、虫好き群の順で得点が高くなることがわかった。

4 考察

本研究では、虫に対する嫌悪の程度で自然体験に対する考え方へ影響が変容することが明らかになった。虫好きの教師志望学生は虫を用いた活動を重要かつ有用性の高いものと考えており、自らそうした活動に取り組んでいくことで学校での自然体験を促そうという傾向があることがわかる。それは、自らが虫を使った活動を行うことが得意であるために、虫を教材として扱おうという意欲を抱きやすいという傾向があることが考えられる。

また、日高(2005)が述べるように、虫好き群の者は幼少期から虫好きであることが多く、そのため自分が幼いころ虫に触れる経験を重ねていることが考えられ、虫とのふれあいという経験を子どもにも同じようにさせたいという考えを持つことが考えられる。